［研究ノート］

大学生のアイデンティティと友人関係に関する予備的研究

大阪大谷大学　人間社会学部　人間社会学科
准教授　田沢　晶子

大学生は青年期から成人期への過渡期であり、アイデンティティの形成時期として位置づけられる。青年期に築く友人関係や恋愛関係といった親密な他者との関係は、彼らのアイデンティティ形成に影響を与え、他者を受け入れ、同時に他者とは異なる存在として自己を認識する過程を促す(Erikson,1950)。その後、互いの違いを理解し、相手を尊重しながら関係を維持する成人期初期の親密性という発達課題へと進展する。落合・佐藤(1996)は、青年期における友達との付き合い方の発達的変化を研究し、青年期初期の「広く浅くかかわるつきあい方」から年齢が増すにつれ「深く狭くかかわるつきあい方」へと変わっていく様子を明らかにした。

一方、現代青年の友人関係を「円滑で楽しい友人関係を求めながらも、関係が深まることは拒絶する」といった、表面的な楽しさで群れるが互いの内面には踏み込まないよう気遣いながら関わるという指摘がある(岡田,1995,2002；小塩,1998)。青年期の友人関係の特徴をとらえるため、岡田(1993)は友人関係尺度を作成し、「不介入」「気遣い」「群れ」の 3 因子を見出した。同尺度の因子分析を行った小塩（1998）は、「気遣い」「積極的楽しさ」「一線を引いた付き合い」「集団同調」「自己開示的関わり」の 5 因子解が妥当としている。5 因子間の関係にはまとまりがあり、二次因子分析から友人関係を構成する 2 つの次元「広い－狭い」「浅い－深い」を見出た。これをもとに友人関係のあり方を「広く浅い付き合い方」「狭く浅い付き合い方」「狭く深い付き合い方」「広く深い付き合い方」という 4 分類を行っている。そして、「広い」友人関係を自己報告する青年ほど自己愛傾向が高く、「深い」友人関係を報告する青年ほど自尊感情が高い傾向にあるとし、互いに気を使うことなく親密な付き合いをする「深さ」は青年の心理的適応に影響を及ぼすと考察している（小塩, 1998)。自尊感情はアイデンティティと密接に関連するので、小塩(1998)、落合・佐藤（1996）の先行研究を踏まえると、友人関係における「深さ」の次元、及び「狭く深い付き合い方」が自我同一性形成と関連するのではないかと考えられる。

マーシャ（Marcia,J.E.）のアイデンティティ地位概念を踏まえて考案された同一性地位判定尺度では、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の下位尺度からアイデンティティがどの程度獲得されているかを判定する(加藤, 1983)。同尺度を用いた大学生を対象とする調査では(井下,2011)、同一性達成地位の減少やモラトリアムと同一性拡散の中間地位である D-M 中間地位の増加が報告されている。これより、必ずしも同一性達成地位と友人関係における「深さ」や「狭く深い付き合い方」との間に明確な関連が

認められるとは限らず、探索的な調査を要する。

これらの先行研究を踏まえ、自我同一性の状態と友人関係がどのような関連を持つのか検討することを本研究の目的とする。同一性地位判定尺度（加藤,1993、）、友人関係尺度（岡田,1993;小塩,1998）を用い、自我同一性地位と友人関係の 2 次元「深さ」「広さ」との関連を検証する。

方法

手続き・調査対象者

2016 年 8 月から 11 月。近畿圏の 4 年生大学の学生に講義終了後、質問紙を配布し、「大学生のアイデンティティと友人関係」に関する研究の一環として、調査への参加を依頼した。自宅にて回答し、1 週間後の講義時に回収すること、調査への参加は任意であり、答えたくない質問には回答しなくて良いこと、授業評価には無関係であること、また調査への参加・不参加に関係なく本調査に関連する過去の研究からフィードバックを行うことを教示した。有効回答数は 85 名であった。

調査票

1. 同一性地位判定尺度（加藤,1993）。12 項目。「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の 3 下位尺度からなる。自我同一性の状態を 6 段階で判定するもの。
2. 友人関係尺度。4 件法。岡田（1993）より、小塩（1998）が分析に用いた 24 項目を使用。

結果・考察

１．友人関係尺度の因子分析

a.一次因子分析　友人関係尺度の 24 項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と解釈可能性から 5 因子解が適当であると判断した(表 1)。5 因子による累積説明率は 41.89%であった。

表 1.　友人関係尺度の因子分析結果　　項目番号は小塩（1998）と同じ

項目	F1	F2	F3	F4	F5
17 意見や好みがぶつからないよう気をつける	**.638**	.074	-.108	-.044	-.196
01 友達と一緒にいるときでも別々のことをする	**-.570**	.367	-.131	-.057	.351
26 友達グループのメンバーからどう見られているか気にする	**.565**	-.010	-.070	.278	-.046
18 自分を犠牲にしても相手につくす	**.562**	-.186	-.100	.155	.192
16 話題についていけるように気をつける	**.526**	.079	.127	-.076	.204
11 互いを傷つけないように気をつかう	**.447**	.277	.155	-.270	.107

27 友達グループのためにならないことを決してしない	**.420**	-.021	-.113	.177	-.105
10 相手の言うことに口をはさまない	**.409**	.084	-.277	-.324	-.226
03 お互いの約束は決してやぶらない	**.405**	-.217	-.030	-.065	-.036
13 お互いのプライバシーには入らない	-.271	**.806**	.110	-.002	-.105
20 あたりさわりのない会話ですませる	-.051	**.595**	-.126	.118	.240
05 心を打ち明けて話をする	.117	**-.553**	.246	-.055	.224
21 まじめな話題にならないように気をつける	.148	**.523**	-.230	.346	-.126
06 お互いの領分に踏み込まない	-.097	**.453**	.164	-.097	-.151
14 相手の考えていることに気をつかう	.301	**.323**	.169	-.195	.155
07 ウケるようなことをする	-.101	-.100	**.925**	.121	-.143
12 冗談を言って相手を笑わせる	-.054	.075	**.736**	-.002	.026
19 楽しい雰囲気になるように気をつかう	.279	.277	**.456**	.258	-.006
02 1 人の友達と特別親しくなるよりはグループで仲良くする	-.013	.091	.000	**.620**	-.196
22 みんなで一緒にいる	.116	-.066	.236	**.598**	-.159
24 友達から取り残されないようにする	.365	.066	.021	**.421**	.203
09 相手に甘えすぎない	.003	.382	.110	**-.386**	-.215
23 真剣な議論をする	.014	-.154	-.076	-.215	**.809**
08 突然まじめな話をして相手をしらけさせない	.132	.249	.004	.061	**-.317**
因子間相関		F1	F2	F3	F4
	F2	.508			
	F3	.318	.133		
	F4	.173	-.098	.035	
	F5	.165	.027	.190	.391

N=85

第 1 因子に高い負荷量を示した項目は「好みや意見がぶつからないよう気を使う」、「友達と一緒にいるときでも別々のことをする(逆転)」、「友達グループのメンバーからどう見られているか気にする」であり、「気遣いをする関係」とした。第 2 因子に高い負荷量を示した項目は「お互いのプライバシーには入らない」、「あたりさわりのない会話ですませる」、「心を打ち明けて話をする（逆転)」であり、「一線を引いた関係」とした。第 3 因子に高い負荷量を示した項目は「ウケるようなことをする」、「冗談を言って相手を笑わせる」、「楽しい雰囲気になるよう気をつかう」であり、「楽しい雰囲気を維持する関係」とした。第 4 因子に高い負荷量を示した項目は「1 人に友人を特別親しくなるよりはグループで仲良くする」、「みんなで一緒にいる」「友達から取り残されないようにする」などであり、「グループに同調する関係」とした。第 5 因子に高い負荷量を示した項目は「真剣な議論をす

る」、「突然まじめな話をして相手をしらけさせない(逆転)」であり、「自己開示をする関係」とした。

b.　二次因子分析　一次因子分析で得られた 5 因子の因子間相関と因子内容を見ると、因子間の関係は均等ではなく、まとまりがあると考えられた。そこで、一次因子分析のプロマックス回転後の因子得点をもとに二次因子分析を行った。固有値 1 以上を因子数決定の基準とし、主因子法、プロマックス回転により 2 因子を抽出した(表 2)。2 因子による累積説明率は 48.43 であった。

表 2　友人関係尺度の二次因子分析　　N=85

		F1	F2
F1	気遣いをする関係	**.927**	.136
F2	一線を引いた関係	**.679**	-.226
F3	楽しい雰囲気を維持する関係	**.302**	.154
F4	グループに同調する関係	-.057	**.730**
F5	自己開示をする関係	.036	**.616**
	因子間相関	F1	
	F2	.22	

第 I 二次因子に高い負荷量を示したものは F1「気遣いをする関係」、F2「一線を引いた関係」、F3「楽しい雰囲気を維持する関係」であった。また、第 II 二次因子に高い負荷量を示したものは F4「グループに同調する関係」、F5「自己開示をする関係」であった。小塩(1998)は、二次因子分析の「気遣い」「一線を引いた付き合い方」を対人関係の広さ、「集団同調」「積極的楽しさ」「自己開示的関わり」を対人関係の深さとし、2 つの独立した次元を見出している。本調査においても、F3「楽しい雰囲気を維持する関係」を除いては類似しているものの、二次因子分析で得られた 2 因子を広さ、深さと解釈するのが妥当とは思われなかった。また 2 因子間には弱い相関がみられたため、独立した因子と見なされず、広さ、深さの 2 次元より分類は行わないこととした。そこで、友人関係尺度 5 因子と、同一性地位判定尺度の各アイデンティ・ステイタス、及び下位尺度との関連を検証することとした。

3.　友人関係尺度と同一性地位判定尺度の関連

同一性地位判定尺度は「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の 3 下位尺度よりなり、各下位尺度の得点の組み合わせから、同一性達成地位、同一性達成―権威受容中間地位(以下 A-F 中間地位)、権威受容地位、積極的モラトリアム地位、同一性拡散―積極的モラトリアム中間地位(以下 D-M 中間地位)、同一性拡散地位の 6 つの地位に分類する。本調査では、D-M 地位が 62.4%と最も多く、次いで同一性拡散地位が 21.2%で

あった。積極的モラトリアム地位は 3.5%、権威受容地位は 2.4%、A-F 中間地位は 4.7%、同一性達成地位は 5.9%であり、自我同一性がある程度形成されているとみなされる A-F 中間地位と同一性達成地位を合わせても全体の 10%程度であった(図１)。

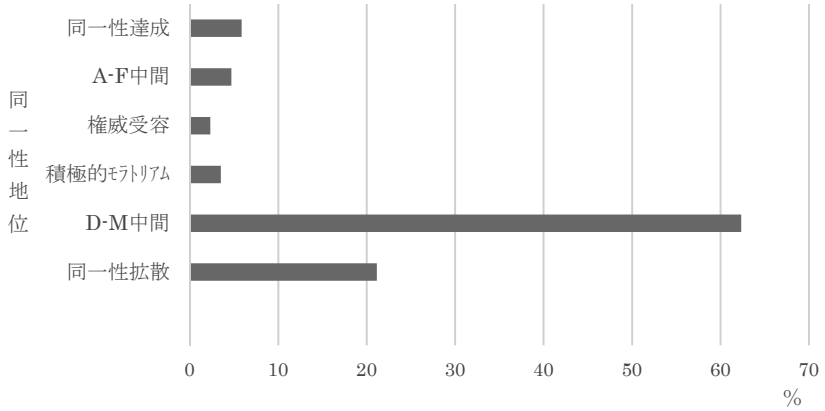

図１．各同一性地位の分布　N=85

次に、同一性判定尺度の 3 下位尺度と、友人関係の 5 因子の相関係数を算出した(表 3)。

表 3. 同一性尺度の 3 下位尺度と友人関係尺度 5 因子の相関係数　N＝85

	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求
F1 気遣いをする関係	.247*	0.135	0.200
F2 一線を引いた関係	-.235*	0.024	-.227*
F3 楽しい雰囲気を維持する関係	0.136	0.163	.231*
F4 グループに同調する関係	0.072	-0.102	0.070
F5 自己開示する関係	.287**	.326**	0.177

*p<.05　**p<.01 を示す

友人関係尺度 F1「気遣いする関係」と同一性地位判定尺度「現在の自己投入」に正の相関、F2「一線を引いた関係」と「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」に負の相関、F3「楽しい雰囲気を維持する関係」と「将来の自己投入の希求」に正の相関が認められた。また F5「自己開示する関係」と同一性地位判定尺度 3 下位尺度すべての間に正の相関が認められた。これより、F1、F2、F3、F5 がアイデンティティと関連し、F1、F3、F5 は、因子の内容から「個が確立した友人関係」、F2 は「個が未確立の友人関係」であると推測された。そこで、この 2 つの友人関係について、同一性地位判定尺度 3 下位尺度との関連を検証した。F1、F3、F5 の合計得点、F2 の得点を上位 25%、下位 25%で Hi/Lo 群とし、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」得点を比較した(表 4)。

表 4－1　個が確立した友人関係 Hi/Lo 群の同一性判定尺度 3 下位尺度の平均値、SD、ｔ検定の結果

	個が確立した友人関係		F1F3F5 の合計			
	Hi(26)		Lo(23)		t 値	
	M	SD	M	SD		
現在の自己投入	15.846	4.135	11.826	4.334	3.321	**
過去の危機	18.154	3.641	15.696	3.470	2.411	*
将来の自己投入の希求	16.115	3.011	13.087	4.502	2.797	**

*p<.05　**p<.01 を示す

表 4－2　個が未確立の友人関係 Hi/Lo 群の同一性判定尺度 3 下位尺度の平均値、SD、ｔ検定の結果

	個が未確立の友人関係		F2 の合計			
	Hi(24)		Lo(18)		t 値	
	M	SD	M	SD		
現在の自己投入	12.375	3.876	15.333	4.765	2.218	*
過去の危機	17.042	3.973	16.833	4.204	0.164	
将来の自己投入の希求	13.583	4.180	16.222	3.422	2.183	*

*p<.05　を示す

表 4－1 より、「個が確立した友人関係(F1,F3,F5)」Hi 群は Lo 群よりも、同一性判定尺度 3 下位尺度すべての得点が有意に高かった(t(47)=3.321, p<.01 t(47)=2.411, p<.05 t(47)=2.797, p<.01)。個が確立した友人関係を持つものは、現在何かに打ち込んでおり、過去になんらかの危機を体験している、そして将来自分が傾倒できるものを探しているということがわかる。すなわち同一性地位達成傾向と見なしてよいであろう。現代青年の友人関係において、F1「互いに気遣いする関係」は、相手を配慮できるという肯定的な意味をもっており、その上で相手の信頼を裏切らず良好な関係を構築するという適度な心理的距離を保った関係であることがうかがわれた。また F3「楽しい雰囲気を維持する関係」は、友人関係尺度の項目の負荷量を見ると「相手のいうことに口をはさまない(-.277)」、「心を打ち明けて話をする(.246)」「あたりさわりのない会話ですませる(-.126) 」であり、ある程度互いの領域に立ち入った関わりであると予想される。F5「自己開示する関係」は、その項目より、相手と食い違っても真剣な議論する姿勢を示している。これらの因子があらわす友人関係は、現在青年特有の特徴を示していながら、アイデンティティの形成と密接に関連していると考えられた。

一方表 4－2 より、F2「一線を引いた関係」では、Hi 群は Lo 群よりも、同一性判定尺度「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」の得点が有意に低かった(t(40)=2.218, p<.05 t(40)=2.183, p<.05)。F2 の得点の高いものは、現在傾倒できる何かを持たず、将来に対し

ても積極的に選択しようという姿勢に乏しい、アイデンティティ拡散傾向であると推測される。このような個が未確立の友人関係では、自他の違いが明らかになるような場面を避ける防衛的な態度から、互いのプライバシーに立ち入らないよう過度に気にしながら、本音を出さず真剣な関わりを避けると考えられた。

現代青年特有の友人関係、すなわち友人関係場面での深刻さを回避して楽しさを求め、友人と一緒にいることを好む(岡田,2002;小塩,1998)特徴は、本調査より、‘気遣い’という点に異なる方向を持つものと捉えられる。同一性達成傾向と関連がみられた友人関係尺度 F1、F3、F5 因子より彼らの友人関係は、次のようなイメージであろう。基本的には友人グループからどのように自分が捉えられているのかを相手の言動から推測し、相手を傷つけないよう言葉を選び、話題を気に留め、楽しい雰囲気を維持する中で、時に自他の領域に踏み込んだ発言や話をする。このような関係は、単に表面的な友人関係とは異なる要素を持っていると思われる。現代青年にとってこのような‘気遣い’ができるということは、むしろ彼らの自我同一性の形成と結びついているようだ。現代青年の友人関係の特徴をきめ細かくとらえることができる尺度を使用して、本調査で見られたような特徴がみられるか、アイデンティティの形成と関連するかをさらに検証する必要があるだろう。

今後の課題として、友人関係において、「広さ」、「深さ」の 2 次元がとらえられるのかを確認するため、さらなる調査を行う必要がある。データ数を増やすとともに、現代青年の友人関係の特徴をきめ細かくとらえる多項目式の尺度（落合・佐藤,1996 など）を用いる必要があるだろう。また、アイデンティティを捉える尺度として、加藤(1998)の同一性地位判定尺度を用いたが、6 つのカテゴリのなかで D-M 中間地位と判定される者が極端に多く、井下(2011)と同様の結果となった。対象者の多くが大学 1，2 年生であったこととも関連すると思われるが、同尺度を大学生に用いた場合、アイデンティティの確立度合を 6 つのアイデンティティ・ステイタスより判別するのは妥当とは言えないのではないか。他のアイデンティティを測定する尺度、例えば多次元アイデンティティ発達尺度(仲間・杉村・畑野・溝上,2015)や多次元自我同一性尺度(谷,2001)の使用も検討したい。

引用文献

Erikson, E. H. 1950　Childhood and Society. NY: Norton.（仁科弥生訳　1977　幼児期と社会　みすず書房）

井下雅恵　2011　大学生の友人関係と自我同一性地位に関する研究　大阪大谷大学人間社会学部人間社会学科　卒業論文

加藤厚　1983 大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究 **31**(4)，292-302.

仲間玲子・杉村和美・畑野快・溝上真一・都筑学　2014　多次元アイデンティティ発達尺度(DIDS)によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み　心理学研究，**85**，549－559.

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達との付き合い方の発達的変化　教育心理学研究，44(1)，　55-65.

小塩真司　1998　青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連　日本教育心理学研究，　46，　280-290.

岡田努　1993　現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究　5，43－55.

岡田努　1995　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，　43，354-363.

岡田努　2002　現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究，　10(2)，　69-84.

谷冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成―　教育心理学研究，49，265－273.